

【講演】

わが国における犯罪予防とコミュニティ

藤 岡 一 郎

京都産業大学 名誉教授

序. はじめに

自転車窃盗事案 特殊詐欺事案

都市化 個人主義（利己主義） 科学技術の発展

少子化 高齢化 グローバル化 専門サービスの多様化

公助 自助 共助

1. 子どもの安全と学校安全の動揺（子どもの世界の消滅化）

1980年代から顕著になる子どもの安全、1990年代後半からは学校安全

20世紀末から21世紀初頭にかけて犯罪の増加

2. 犯罪予防とインフォーマルな規制の希薄化

社会と個人の関係 「縁」の関係の多様化

社会 { (国、地域、都道府県、市町村、学校区、町内会)、家族 }

3. 弱者のコミュニティの崩壊

情報機器の発達

家族・家庭の動揺・変容

孤立化の進行加速

4. 安全安心なまちづくりという総合施策の展開

生活安全条例

まちづくり実践手法の一般化

京都モデル

5. むすびに——個別対応は可能か

啓蒙（教育）

制度的整備

各種機関と多様な住民とのチーム作業

ご紹介いただきました藤岡です。よろしくお願いいたします。レジュメは紙ペーパーで、ご不便をかけるかも知れませんが、お許しください。フェルソン先生とは少し視点の異なる側面があるかも知れませんが、多分、同じような結論になるかと思います。

まず、20分間の持ち時間が30分間もいただけるようですので（笑）、少し雑談めいた話から始めようと思います。

先日、京都府警の岩倉交番の警察の方が、私の町内に回って来られまして、高齢者のお宅を、一軒一軒訪問する活動を行なっているということで、非常にうれしいことをやっているなと思っていましたが、ついに私の家にも来られました。光栄ですね（笑）。そこで、「ご主人は今何をしているのですか」と（笑）。家内もまだ慣れていませんので戸惑い即答できなくて間をおいて、「退職したのですけど」と言ったらいいのですけれども、その後だんだん話がはずんできて、「い

や、自分の息子も、産大行っています」などと、和気あいあいの話で終わっただけなんです（笑）。

要するに、そういうふうには、日本のポリシングは、単純に警ら活動といいますが、そういうものを越えた範囲の活動、従来これにはいろいろ批判もあるのですが、依然として継続しているところがあります。もちろん警察官にその時間的余裕がないのが多分多いのだと思いますけれども。しかし、犯罪防止あるいは福祉という側面からみましても重要で、内容のあるポリシングというのは現代的にも意義あることだと思います。

フェルソン先生のお話は、要するにこういう一種の村落社会といいますが、お互いの顔が見え、そしてお互いが感じている、そしてお互いが責任を持てて、そういう中で日々を送るというあり方が成立する物理的空間を形成することが、犯罪防止の大きな柱になるという、お話だったのではないかと思います、間違っていたらご容赦願います。そのご指摘が生きているエピソードをお話したのです。

もちろん、これは、先ほどもお話にございましたように、ビレッジとは異なった都市という物理的建造物の再生を超えた物理的空間の形成のために、1961年にジェイン・ジェイコブズの主唱した都市再生に関係した「ビレッジ」理念の創造であり、わが国で翻訳がでたのが1969年で、その後日本にも大きな影響を与えます。

ですから、そのころから、当然都市の再開発の際に、防災防犯に強い物理的建造物の建設にその考え方は反映してきましたが、コミュニティと一体となった考え方が、大切なことだというふうには認識したのは、日本では1990年代になってからであります。犯罪予防の時代だと言われるかもしれませんが、まさに日本は1990年代に入って、トータル的な意味での犯罪予防の気運が出てきたということでもあります。

その際に、今日お見えになっているフェルソン先生などの日常活動理論であるとか、あるいは、アメリカだけではなくてイギリス内務省（ホーム・オフィス）などで検討されたクラークなどの研究成果というものも併せ検討しながら考えてきたということです。

先ほど、フェルソン先生は、日本のそういう物理的空間をビレッジと表現され、犯罪を抑止する機能があるというお話をなさいました。これは当然アメリカとの比較の上でありますけれども、例えば今日中心にお話する150万都市京都というのは、我が国において、比較的ビレッジ的側面を多く遺している地域であると思います。

ただ、変化がなかったわけではありません。特に戦後、それも1970年以降、徐々にそういう村落社会の窮屈さ、あるいは不自由さ、あるいは自分のプライバシーを侵される、そういううっとうしさから脱したいという思いが非常に強くなってきました。いわば個人主義の開花が、ビレッジを内的に打ち崩す方向に働いてきたのであり、個人とコミュニティとの在り方に関するアメリカとは真反対のアプローチが特に1990年代以降求められていました。ですから、物的には、集落的に見えるところでも、先ほど、フェルソン先生のお話からいうと、隣人の協力によって地域社会を監視する機能は徐々に脆弱になっていたということです。例えば80年代後半に起こった問題のひとつは、子どもの問題でありました。子どもが被害者になる犯罪、あるいは加害者なる非行が増加するに従い、どのように子どもを守り育てるのかということが、大きな課題になってきました。

ご承知のように、子どもが犯罪や非行に巻き込まれるということは従来からあったわけではありますが、幼児の誘拐・殺人など世間の耳目を集める事件が多くなったのが90年代であり、学校内、放課後、登校・下校、遊び場そして家庭においても、子どもの安全が脅かされ、子どもの安全領域が狭小となってきました。

日本人の感覚からいいますと、家庭の安全、学校の安全そして地域の安全は当然でフェルソン先生のいうビレッジの機能が働いていると思っていただけたはずですが、実際には子どもの安全な居場所が消失しつつあったわけですね。そこで、子どもの安全を守ることを契機に、安全安心という場合は犯罪防止に限らないわけで、福祉をはじめ同じ社会構造の欠陥を持ったシステムの再生あるいは創造が課題となったのです。

わが京都の現状ではどうであったかです。典型的な学校の安全というものが脅かされたのは、池田小事件の2年

前に発生した日野小事件（1999年）であり、学校内で、児童が、侵入者によって刺殺された事件でした。容疑者は、ご承知のように自殺を遂げました。これを契機に、学校の安全を如何に確保するのが当面の京都市の課題となり、最終的には学校安全に関する提言を全国に発信しましたが、それは生かされず池田小事件が発生し、局面は日本全国の課題に敷衍するきっかけとなりました。家庭、学校、地域を含むコミュニティの在り方、既存の行政機関のあり方がクローズアップされたわけです。

つまり地域社会の在り方というものを考える必要があり、コミュニティをどのようにオーガナイズするのかということが、大きな意味を日本では持っていたのです。その背景には「子どもは社会の宝物」とわが国ではよくいわれますが、家庭、学校、地域社会それぞれが子どもの育成の役割を担っているということです。その役割の機能不全を如何に回復するか、あるいは子どもの育成は全くこれまでと異なる枠組みで考えるのが問われました。

それ以後全国津々浦々で提起された安全安心の確保方策の根幹はコミュニティの多様なプロモートでした。京都は、それではどういうパターンをとったのでしょうか。

京都市は、これはもう京都の人はほとんどご存じなのですが、地域社会において小学校の位置づけが大きな意味を持っています。これは地域社会の力で創設した番組小学校の歴史に由来する地域社会の絆の強さです。国がつくったのではなく地域社会の人々が、自分たちで小学校をつくり、その地域の子は、その学校に行き、そして、自分の子や孫が、またその学校に行くこの日常的循環の歩みが、地域が一体となって子どもたちを守り、育てる基盤となってきました。それゆえ小学校区という単位は、京都市の中で左京区などの行政区の単位がありますが、行政区の中に小学校区という単位があり、町内会、組などの組織とともに、コミュニティが形成され活動しているのです。

ですから、小学校区に関与する人々が、子どもたちをどういう形で見守ったらいいいのかということで、まず、問題提起がされてきたわけです。まず登校時、下校時、放課後の子どもたちの自由な時間をどういうふうにして守るのか。これが、まず大きな課題になりました。先生方や、あるいは警察の方とか、要するに通常の機関の活動は当然なのですが、地域の人たちも主体的にそれに参加し見守っていこうという課題解決の方向が出てくるわけです。このアクティビティは従来から活動している子どもの交通安全を見守る活動の拡大という側面が強いのですが、子どもの保護者だけでなく高齢者をはじめ地域の人たちが参加し、参加の仕方に地域の特性を加味した工夫がなされているなど従来とは異なる活動であり、その活動は現在も続いています。これは、だから義務めいた当番制でやっているとか、任意なのかも地域によってさまざまあります。実にいろいろな形態をそこに持ち込みながらやっています。子どもたちをスーパーバイズする時間を父母など保護者のみならず地域の様々な人々が多く持つということが肝心だと考えているのです。

ところが、池田小は、国立の小学校で先程も述べましたが、京都市に典型的に現れるような公立小学校と違って、国立の小学校あるいは私立小学校は、基本的に地域社会を持っていないわけです。そうしますと、公立小学校に通う子どもたちのようなスーパーバイズで子どもたちを守ることができにくく、各保護者の責任において、たとえば車で送り迎えをすることになります。それゆえに学校内での子どもの安全に重点が置かれがちで、子どもの安全が学校安全の領域に矮小化されがちになります。外部からの学校安全を害する要因を排除するために監視カメラなどを備え外部と遮断したいわば要塞化が進展してきました。諸外国ではこのような学校は常態であるかもしれませんが、わが国ではまだかなり抵抗感のある学校の姿だと思います。

このような池田小のあり方というのは、今後、日本社会の変容による必然の流れなのかという課題は残ります。学校外の子どもの守るという点において、例えば登校時、下校時、それをどのような手段で守ろうとしているのか、さらに子どもの教育をどのように考えるのかという根本的な課題が残されていると私は見えています。公立小学校とはこの点がやはり大きな違いで、京都市の場合はまさにその場面を地域の人々を中心に守る連携をもとに一連の過程をつくり、家庭、地域社会、学校、行政機関の連携でスーパーバイズできる体制をつくり、態勢を整えてきたのです。それは子どもの教育につ

いて地域社会の役割を重視している表れです。

そうすると、その次に出てくるのは、そういう形で参加してくれる地域住民が必要です。これは、先にフェルソン先生の指摘された「責任」を地域住民が、どういう形で醸成するのかという課題であります。そこに住んでいるから責任・義務感を持つという人ばかりではありません。どうやってそれを醸成し継続してゆくのが課題なのです。ソフト面のインフラが整っていない地域社会にするためにさまざまなアプローチがなされプロモートしているわけです。例えば、地域社会での様々なイベントの開催を通じて啓蒙活動を展開し、子どもたちを自分たちの宝として、それを育成していこうという機運を醸成し、子どもの見守りに例えば高齢者の参加に繋げています。これは地域社会再生の一要素となる人的循環形成を図ることにもなっているのです。だから、そこに住んでいるということによっておのずから生じるのではなく、地域社会の住民間の連携そして家庭、地域社会、学校、行政機関との連携こそが、子どもをスーパーバイズする基盤形成なのです。京都市、あるいは京都府の場合も、このコミュニティ再生の視野でとらえています。それは、まちづくりに関係します。

このまちづくりは、ハード面のいわば物的な建造物の形成する公共空間の側面とともに他面ではソフト面のコミュニティの形成、要するに、住民が相互に尊敬し合いながら、お互いを助け、そして、自分たち自身も自分の隠れた才能を伸ばすことのできる住民の日常生活の側面から成っています。しかもこの両面は密接な関係があるということは、特に近・現代の大都市においてはジェイコブスの著作によって指摘されたことでした。ハード面の在り方はソフト面の在り方によってその公共空間の在り方が変わりうるということは、民主主義社会の原則が生きている以上、ソフト面の在り方が問われるのは当然のことなのです。そして、安全安心なまちづくり全体の一環としての防犯、防災を図るうえでも同様のものです。

ところが、先ほど言いましたように、個人主義化の進展とともに、悪い言葉で言えば、利己主義化が起こっているわけですが、個人主義の進展と地域社会全体とのバランスをうまく保ち得ない人たちが増えている現状を踏まえて、どういう形でそれを調和させるのかであります。

そこで出てきたのが、大きな枠組みでいうと、レジユメの初めに書いています、公助、自助、共助という考え方です。1980年代以降に使用されてきた言葉ですが、特に日本では1995年の、あの阪神・淡路大震災のときに敷衍化することになります。といいますのは、その震災直後自分の力だけではどうしようもない状況で、住民が日ごろそのサービスを期待していた消防や警察など行政機関の力（公助）も物理的に間に合わなかった。結局、隣近所の人々相互が助け合うという状況があり、共助の意味合いが重要だと認識したわけです。自助と公助で個人主義社会の効率的サービスは満たしうるという考え方に対する懐疑でした。

それは犯罪防止システムにおいても同様で、従来の権力作用としての警察活動などの充実を図れば、犯罪防止サービスは十全であるという考え方に懐疑的になったのです。それは警察活動などの弱体化の結果なのではなく、要するに個人主義化社会への進展という社会構造の変化への国家的対応能力不足の露呈でした。警察などの公助によって、一つ一つ対応するような施策をとっていくことも必要でしょうが、予算的、物理的に不十分であり、また反対に権力作用の適正にも配慮する必要があり、自助、公助で埋められない領域を地域社会の人々とともに埋められないかを思い起こすことになりました。

だから、私自身は以前から、自助、共助、公助の言葉を使っていますが、共助の意味内容がどういうふうに具体的な形としてあるのかという点で、この20年余、震災や衝撃的事件などを背景に全国津々浦々、その地域にあった形での具体策が工夫されてきました。先述した京都は継承してきたインフラである番組小学校区をモデルとした共助の在り方を展開してきました。だから、京都市の安全安心という場合、犯罪防止についても、小学校区ごとに色模様が違う、現代風にいえば、まさにパッチワーク模様ですが、それぞれが独自性を持ちながら、京都市全体の安全安心を確保しているの

です。これは京都府についてもいえるかと思います。

ですから、当然フェルソン先生がおっしゃる日常活動のあり方、要するに、犯罪の機会を、できるだけ少なくするようなライフスタイルをいかに確立するかは個人主義の時代の当然の要請であり、この視点での問題提起は当然重要であります。しかし、日本の犯罪予防は、自助、公助とともに共助の再構築に力点があり、人と人とのつながりを持つ、そういうコミュニティをどういう形でつくり上げていくのかということに基本的な、あるいは根本的な視点を置いています。ですから、それに付随するいろいろな議論を通じて、改めて自助、公助の在り方がコミュニティとの関係で再考せざるを得ないことになり、たとえば、警察改革の一因にもなってきたのです。

ですから、従来だったら、犯罪防止は警察に任せておけといった時代から、まさに警察も地域住民と一緒に協働しなくてはできないことがたくさんあり、また公助のために、警察が他の行政機関との連携を強め協働しないと実効が期待できないことが明らかになるにつれ犯罪予防の体制があらためて問い直されてきたということでもあります。

少し余計なことを言いますが、最近、どの大学でも、要するに、主体的に自分で考え、自分で判断し、問題解決をする能力の育成に努めていることはご承知だろうと思います。その背景にはグローバル化する我が国の人材育成という喫緊の国家的課題がありますが、どの組織体においてもその組織を形成する人材の質の高さによって組織の盛衰を決するとの危機感が、人材育成に傾注する理由でしょう。今日の話題に関連していえば、例えば自助によって自らの犯罪防止能力を高めることが、共助の質、公助の質が確保されるということでしょう。

ですから、個人主義の進展に沿ったそういう人たちで成り立つ共同社会、コミュニティを形成することからもう一度考え直さなければならない段階に立っているということです。フェルソン先生が、日本のビレッジというのは、いわば、いい意味での監視社会になっていると評価されていますが、そのビレッジの変容にこそ現在の我が国の犯罪予防問題の核心があると思います。この点はまた改めて、フェルソン先生にお話をお伺いしたいと思っています。

さて、今日は、京都の人がほとんどですので、京都の良さも悪しき点もしゃべることができるのです（笑）。今日ご参加いただいた防犯担当の方々をはじめ京都の方々は、今日の話題についてはみんなベテランばかりですので、世界に誇れる京都府警だと思っています。

そこでもう少し統合した形で整理する必要がある例として、最後に、自転車の問題です。窃盗犯は現在約 100 万件くらいだと思いますが、そのうちの 3 割ぐらゐは自転車盗です。京都でも割合的にはほぼ同じです。窃盗犯を減らすには、自転車盗を減らせば減るわけです。

この場合、フェルソン先生の見解をどう入れたらいいのでしょうか。かつて約 30 年前に、中国人の方が、「日本人は道路に宝物を落としている」と言っていました。1 つは自転車、1 つは自販機（笑）。こうよく言われました。

これは、自転車が安価になり、学生でもバイトを 2 日やったら自転車を買えるので、安易に放置する所有意識の希薄さと時代風潮の「便利」「楽」の行動基準が一時期蔓延したということでしょう。その背景はいうまでもなく大量生産・大量消費の経済的豊かさがありました。現在は、京都に学ぶ学生の生活実態は当時の様相とは異にしておりますのに、なお、京都で自転車盗の件数が多いのはなぜなのでしょう。自転車に対する当時の感覚が所有者にまだ残っているのか、地域社会とは異なる公共空間（駅、商店街など）での自助、公助、共助の機能が不十分なのかなど、いずれにしても、自転車問題というのは、京都府・市の交通政策とも関係する当面の課題として取り組む必要があると思います。その際、改めて公共空間における犯罪防止の在り方を検討するうえで、フェルソン先生のご指摘を踏まえながら、これまでお話ししてきました自助、共助、公助のそれぞれの中身、その関係を十分に検討していただき、コミュニティ再生の契機となるような行動指針をオーガナイズしてほしいと願っています。

レジュメから脱線した雑駁な話で終わりますが、約 20 分でしゃべりなさいといわれていたのに（笑）、延びましたことお詫びいたします。ご清聴ありがとうございました。

